

## 第4回 阪神新地域ビジョン検討委員会 議事録概要

- 1 日 時：令和3年6月14日（月） 15時30分～17時30分
- 2 場 所：尼崎市総合文化センター（尼崎市昭和通2-7-16）7階第2会議室
- 3 出席者  
委 員：赤澤委員、佐久間委員、松元委員、川中委員、近藤委員、  
定藤委員、谷口委員、水野委員、山中委員  
行政委員：西川委員、堀越委員、大上委員、二口委員、中郷委員、太田委員、平井委員
- 4 内 容
  - (1) 今後のスケジュールについて
  - (2) 阪神新地域ビジョンの骨子案の確定
  - (3) 阪神新地域ビジョンの本体案策定に向けた意見交換

### 【委員】

全体の大きな枠では議論し尽くせないことから、少人数に分かれグループディスカッションという形で議論をすることとなった。特に行政委員から意見をいただく機会ができたので、よろしく願います。まず事務局から今後のスケジュールについて説明いただく。

### 【事務局】

資料1について、今年度は、検討委員会を6月から2ヶ月に1回の開催を目途に、4回開催する。本日の第4回検討委員会では骨子案の確定をいただいたあと、本体案の検討に移る。今回及び第5回では、新ビジョンの実現に向けたシナリオについて、グループディスカッションにより意見交換、検討をお願いします。今回から第7回までで本体案について検討いただき、12月の第7回で本体案の確定をいただく。また、8月に県庁ビジョン課へ骨子案を報告し、12月～1月にパブリックコメントを行い、3月に新地域ビジョンの策定をする予定である。県民の皆さんの意見をお聞きする機会として、引き続き、ヒアリング、ビジョンを語る会、未来フォーラムを行う。

### 【委員】

今回と次回の2回はグループディスカッションを行う。色々な意見をいただくことを主眼に置いていただければと思う。次回はグループディスカッションのまとめをしていただき、第6回でビジョン全体の議論をするということを念頭にグループディスカッションを進めていただきたい。本日の阪神新地域ビジョンの骨子案の確定というのは、ほぼこういう内容でいくということである。骨子案もシナリオも揺らぐと確定ができない。もちろん、第6回、第7回で全体の議論もできるので、まずは確定ということでご理解いただきたい。事務局から骨子案の概要について説明いただく。

## 【事務局】

資料2-1について、前回審議いただいた骨子案のイメージをもとに、第1章は新地域ビジョン策定の経緯、第2章は6項目からなる社会的潮流、第3章も6項目からなる阪神地域の特性、第4章は阪神新地域ビジョンの実現に向けたシナリオ、第5章は新地域ビジョンの実現に向けての5章で構成している。

以前いただいたご意見により修正した点は、第2章 社会的潮流の(5) 経済構造の変容の項目で、「現状・問題点」と「2050年に向けて」の内容を対応した点、第3章 阪神地域の特性に「デジタル技術の革新がベッドタウンの特性に影響を与える可能性」を加えた点、第4章 新ビジョンの実現に向けた方向性では、「みんなにつながるやさしいまち」に防災に関する内容を付加した点である。また、未来ミーティングの意見である「おせっかいがおせっかいだと感じない地域」にする取組もビジョンの実現に向けた方向性に加えた。

基本理念は「コ・クリエーションなまちの実現～住んでよし、働いてよし、集ってよし～」でまとめている。

別紙2の阪神新地域ビジョンの実現に向けたシナリオ（骨子案の第4章関連）は、前回、「現状」から「中間像への取組」、「中間像」、「将来像への取組」、「将来像」の5段階で表していたが、シナリオタイトルについては、重複していた内容の整理と新たなタイトルの追加をし、骨子案の参考資料とした。

資料2-2の参考資料について、各柱立て間の移動内容としては、「1自分らしいスタイルが実現できるまち」では多様な暮らしの実現を重視し、「④シニア・女性の活躍」を加え、「⑥スポーツ」と「②学び直し」の項目を「2自然、歴史、文化が息づくまち、人を育てるまち」から移動、「2自然、歴史、文化が息づくまち、人を育てるまち」は、⑧～⑩の自然環境項目の充実、自然環境への負荷軽減の観点から「⑫再生可能エネルギー」を追加した。「4みんながつながるやさしいまち」はつながりや子育てに関する項目が多かったため圧縮した。『にぎわいのあるまち』は人々の交流の促進や地域の素材に着目した「⑲アートによる交流」を追加した。

これらシナリオタイトルの関係イメージを表したものが別紙3である。基本理念である「コ・クリエーションなまちの実現」に必要な「地域と趣味と仕事が重なる暮らし」をメインコンセプトとし、三方よしの概念で整理した。

資料4は、従前からまとめている県民との意見交換結果、資料5はビジョン課が作成した令和2年度県民意識調査の結果を抜粋したものだが、資料5中P3居住したい場所、P5理想的な働き方、P12地域社会の将来像については、阪神南地域と阪神北地域の回答を統合して結果を表したものである。これら県民の意見をご参照いただき、後程シナリオの内容や構成等について、グループディスカッションで皆様にご意見いただきたい。

## 【委員】

これまでに議論した内容から欠けていることや、こういう視点も取り入れたらというようなご意見もいただきたい。

**【委員】**

資料２－２のP4に「コ・クリエーションなまちの実現」が提示されているが言葉自体を聞いたことがない人がいるため、資料２－１の基本理念の後くらいにコ・クリエーションとは何かを記載した方がいい。

**【委員】**

資料２－２のP4に少し書いてあるが、資料２－１にも「コ・クリエーション」の言葉自体の補足記載をお願いしたい。

**【委員】**

資料２－２をまとめたものが資料２－１と理解している。資料２－１の２章（１）現状・問題点「合計特殊出生率は～」の内容と資料２－２「転出超過」の記載が対応していない。

資料２－１の第２章（５）の現状・問題点「社会のゆがみが～」の言葉が分かりにくい。前は「格差の拡大等が生じる」となっていたと思う。

資料２－１の第２章（６）2050年に向けて「環境問題について～」の文書自体に違和感はないが、SDGsを受けての表現であれば、環境問題に限らず貧困等幅広い課題になるので、SDGs＝環境問題と捉えられないよう、表現を工夫できないかと思う。

**【委員】**

資料２－１にスペースもあるので、具体の説明を反映させていただきたい。

もちろん今日の議論、後半のシナリオも踏まえて、今後、よりここを強調するというような形もあるかと思う。一旦、この時点では確定でよいか。これをもとに後半のシナリオ部分について事務局から説明いただく。

**【事務局】**

資料３について、参考資料の「2040年未来の私たちの暮らし」というビジョン課が現行の全県ビジョンの将来像を具象化するために表したストーリーを参考に、別紙１のとおり「現状や課題」から「将来像」までを描いた。別紙１では、共助、自助、公助を意識して記載し、自助と公助はあくまでもサブテーマとして記載した。このような記載スタイルでよいか意見をいただきたい。

別紙２は、１つの柱立てに６つずつのシナリオタイトルを作成したたたき台である。ディスカッションによりこのシナリオタイトルのそれぞれについて、「現状」から「めざしたい姿」までの各段階の内容を深めていただき、「現状」、「中間像への取組」、「中間像」、「めざしたい姿」に付記する事項と「将来像に向けて」は、その内容についてご意見をいただきたい。

**【委員】**

別紙2を元に議論していただくが、別紙1を見ていただくと「将来像に向けて」、「めざしたい姿」のイメージが、右の上から「将来像への取組」やデータがあって、下に「将来像」が示される。「将来像への取り組み」と「将来像」が似ている感じがするが、「取組」というのは、それに向けてやること（行動）で、「将来像」というのはそれで達成される社会や、幸福度を示していくことになると思う。切り分け、整理しながら活発に意見を出しグループディスカッションをしていただきたい。別紙1の様式でまとめると議論しにくいという意見はあるか。

#### 【委員】

参考資料の右下に「見えてきた兆し」があって、こういう新しい動きがあると記載してある。しかし別紙1のシナリオ案は課題ばかりでポテンシャルが見えない。実はこういう潜在的な可能性を開花させたらこういうビジョンができるという観点も必要かと思うので、「見えてきた兆し」を踏まえて、阪神地域にはこういう可能性があるということを追記してはどうか。

#### 【委員】

これまでの議論の中でも、ピンチはチャンスだとただ描くだけでなく、それがどうチャンスに転じるのかということに記載しようと考えてきた。資料2-1のビジョン骨子案の第2章がそういう構成になっていて、上の行が「現状・問題点」がピンチで、下の行は「2050年に向けて」がチャンス、社会変革を中長期的にみるとそういう可能性もあるという構造になっている。各シナリオにおいても、こういった構造であった方が将来像に向けた流れが理解しやすいという提案なので改善の検討をお願いします。今日の議論はチャンス（「2050年に向けて」）の部分も含めてご検討いただけたらいい。

#### 【事務局（局長）】

別紙2の「将来像に向けて」の欄を全て空欄にしている。「中間像への取組」と「中間像」の次のステップでの取組を区分して書くのが難しい。ずっと先の取組になると、イメージしにくいということと、「中間像への取組」とどう違うのか。同じようなことを書く形になってしまうので、あえて空欄にした。実はこのフォーマットだと、「中間像」があって右側に「将来像に向けて」「めざしたい姿」となっているが、この「将来像に向けて」の取組は書けない気もしている。代わりに「見えてきた兆し」を入れた方がいいのかと話を聞いて思った。考え方をどう整理したらいいのか、スタイルについてご意見をいただきたい。

#### 【委員】

「中間像への取組」も「将来像に向けて」の取組もチャンスの部分なので「できる活動」、「行動」が混ざっている気がする。大きな社会変化の中でチャンスだと思いますよということの一つ示しており、行動を中間的、中期的なもの、将来に向けものに分けるぐらいかと思う。もしかしたら「将来像に向けて」が大きなチャンス、「中間像への取組」がちょっと

手前の短いチャンスになるかもしれない。

### 【グループディスカッション結果の発表】

#### 「1 自分らしいスタイルが実現できるまち」

自分らしいスタイルについて、地域と仕事、仕事の仕方を含めるかが大きな焦点となった。「どういったことを2050年に実現したいのだろうか」を議論した中で、仕事と趣味の時間を分けていく「ワークライフバランス型」か、もしくは自分の趣味や、やりたい事を仕事に生かしていく「ワークアズライフ型」なのかがテーマとなった。2050年になれば、嫌な仕事や単純作業など人間がしなくてもいい仕事をAIやロボットがすることになっても、クリエイティブな作業を人間がしないといけないという観点からすると、日々の学び直しや、仕事のスキルアップを含めた「②いつでもどこでも誰でもできる学び直し」は、刺激を入れながらスキルアップをして、ワークアズライフ型になってくるのではないか。しかし、どうしてもエッセンシャルワーク（人々が日常生活を送るために欠かせない仕事）として残る部分はあるので、ワークライフバランス型も残しながら検討することになる。

「②いつでもどこでも誰でもできる学び直し」「⑤いつからでもスキルアップで仕事にチャレンジ」を分けておくべきなのか議論したところ、お互いにクロスする結果になるが、現状の県民の方の意見も踏まえて考えると、2つの入り口で市民から入る部分と仕事のスキルアップから入る部分、2つとも残した方がいいのではないかという意見があった。また、将来に向けて取り組むには、色々なことに意識改革が必要である。例えばリモート設備が整っていなかったり、リモート環境はあるが使っていなかったりという実態がある。そのリテラシーを含めた意識改革が必要ではないかと議論になった。その中で、一つの突破口は「お試し」をすることになるだろう。例えば猪名川町で「チャレンジショップ」を支援していた事例があり、「こういうことをやりたい」ということに行政や企業も含めて後押しができるのではないか。リモートワークに関しても、(防災の)総合訓練があるならリモート訓練をしていいのではないか。意識の改革が必要である。

「④地域を開くシニア・女性」では、そもそもシニアと女性の活躍を一緒に語っていいのだろうか。活用しきれしていないヒューマンリソースとしてはシニアと女性は一緒に語ってもいいが、シニアと女性の活躍の仕方は全く違うので、活躍の仕方について分けて議論すべきではないか。

最後に、職住近接の里山でのワークスタイル、都市のビルの中で仕事をするということについて、どちらをめざすだろうか。生活と一体のワークスタイルを目指すだろう。例えば、仕事に娘の送迎や荷物の受取りなどもあると思う。そういうこと含め、共存しながらみんなで働いていく。逆にそのことが、メンバーの幸福度につながることもありえるのではないか。阪神地域からリモートを含めた新しい仕事と地域と家族を含めた働き方について提言をしていくことは意義があるのではないか。それがワークアズライフの新しい形ではないか

#### 「2 自然、歴史、文化が息づくまち 人を育てるまち」

環境・自然系の内容と、歴史・文化系の内容という大きな構成があり、そして教育という

テーマが間を繋いでいくような構成になっていることが分かった。そう考えると文化・歴史系の内容が1つしかなく、環境・自然系に偏りすぎではないかという意見があった。もし、「⑦再発見で魅了する阪神間モダニズム」のみで進めるのであれば、「阪神間モダニズム」に特化するのではなく、「阪神間地域の文化」というような広がりのある言葉に直したほうが良い。「阪神間モダニズム」に特するのであれば、「⑱アートが人を呼び広げる交流」のシナリオを持ってくるとバランスがとれる。

教育の部分に関しては、環境教育や文化体験などの要素を入れることによって、「教育」が「自然」と「歴史・文化」をつないで総括的に地域を活性化していくようにすれば目指すべき将来像が明瞭になる。

全体的な議論になるが、阪神地域というのはポテンシャルが大きく、自然があり歴史や文化もある。だから課題解決型の思考よりも、いかに潜在的価値や可能性を見つけ出すか、いかにそれを盛り上げていくかという視点でシナリオを描いた方が説得力があり、未来志向になっていくという意見があった。

少し俯瞰的な話になるが、「将来像に向けて」、「めざしたい姿」は、かなり具体的に書いてあってリアリティがある。一方で、全体的に捉える視点にばらつきがある。市民視点、大学視点、企業視点でまとめ直してはどうか。統一感が出るように形式を整えた上で書いたほうがいいのか、それとも具体的なシナリオを書く方向でいいのか、そのあたりを全体的に考えた方がいいのではないか。それに関連して、SDGsの視点が大事であるという意見もあった。ただこの意見に関してはSDGsはもっと大きな概念なので、地域ビジョン全体で出したほうが良いという意見も出た。

コ・クリエーションという重要なキーワードがあるのに、文化の創造、文化を生み出すことについて、「めざしたい姿」の中で触れられていない。コ・クリエーションするという観点から、もう1度「めざしたい姿」を作り直した方がよい。その場合、あらゆる分野において自主的・自律的な市民活動が重層的に展開されている社会が一つの目標になるだろう。将来像の中には「文化、自然、教育面で自主的・自律的な市民活動が当たり前になっている姿をめざす」ということを全体目標とすると良いのではないかと。観光やエンターテインメント、エコロジーなど、産業との関係も、将来像に入れることで活躍する社会、めざすべき社会が見えてくるのではないかと。

また、デジタルアーカイブ事業が宝塚市で推進されているが、それは地域の「自然・歴史・文化」とICTをつなぐことで生まれる可能性である。地域共通の目標としてはどうか。

### 「3 みんながつながるやさしいまち」

シナリオタイトルに過不足がないかということと、そのうえでめざしたい姿についてという2段階で検討した。

現在の対象に加えて、障害者や不安定な雇用形態にある人々を加えることが必要ではないか。また、「⑲子どもの元気と世代を超えてつながるニュータウン」は、ニュータウンだけが取り出されて地域の姿が議論されていることに違和感がある。このシナリオは子供と若者を対象とした方がよいのではないかと。また、子ども、子育て、高齢者、在留外国人等の対象

が列記されているが、それらに一貫して「みんながつながるやさしいまち」というような地域のシステムをどう作っていくのかを考える必要がある、「⑱家族のように支え合う地域」にまとめ直す必要があるのではないか。こうした意見が出された。また地域のシステムの議論ではソフトだけではなくハード的な側面も合わせて考える必要があるという話があった。

「⑯みんなで助ける防災減災」に関しては、誰ひとり取り残されないような防災減災、あるいは公的な情報の共有といった表現がよいのではないかと。「めざしたい姿」や「将来像に向けて」は、「みんながつながるやさしいまち」で総論的な議論が進み、「つながるというのは一体どういうことだろうか」といったことを考えることになった。濃いつながりから薄いつながりまでであるが、個人の価値観やライフスタイルに即して選択ができる多様なつながり方、そしてそのつながり方を実現するための多様な接点をつくっていくという大きな社会ビジョンをまずは掲げる必要があるだろう。その際に、「めざしたい姿」に地縁だけではなく様々な場でのつながり方があることを一つ一つ見ていく必要がある。

災害時や困窮時を想定した場合には求められるつながりとして、一定の濃さがある、「気にかけて」関係がイメージされた。つながり方の多様化という話と関係するが、「働く」ということと「地域とつながる」ということを結びつけていく取り組みも考えられないか。

最後に、子育てに関する「⑭おせっかいがお節介でなくなる子育て」について、子育てや教育を進めるにあたって、経済的あるいは精神的なストレスやプレッシャーが感じられないような社会をめざすべきではないかとの意見が共有された。

こうしたやりとりがなされたが、将来像に向けての具体的な議論までは至らなかった。

#### 「4 にぎわいのあるまち」

全体の枠組みについて意見が多くあった。「中間像への取組」、「将来像に向けて」を、書き分ける必要があるのか。また、「将来像」は2050年ということで、ここを具体的に書けば書くほど固形化されてしまい、取組が将来像に書いた事以上にならないことがある（将来像のボリュームダウンになる）ので、書き切らないように意識した方がいいのではないかと。

今、「中間像への取組」は行政がやること（公助）に見える。共助で市民が取り組むところ、県民が取り組むところを、グループディスカッションしようとしたが、「中間像への取組」が、そういう書きぶりになっていないのではないかと。ビジョンを考えていく上で、やはり共助（市民がやること）を書くのであれば、公助（行政がどのようなことをやるのか）の議論もセットにして、取組も主体ごとに書き分けていくことを意識した方がいいのではないかと。その上で、市民ができることを、市民の意識改革や行動変容を促すようなスイッチみたいなものを探ることが大切なのではないかと。ここまでが枠組みの話である。

シナリオの検討結果については、「アート」や「食」の区分になっていて、これでいいのかもしれないが、にぎわいを考えたときに、単体で取り組んでいても広がりが生まれなため、違う分野のものをかけあわせていく発想が必要だという意見があった。アートはアートだけで完結するのではなく、アートを楽しむ、見る、食べるなど五感で地域を感じさせるような仕組みをめざす総合力をシナリオにするという話があった。阪神地域はコンパクトにまとまっているので、地区ごとに別々なことをするより、地区ごとの活動を結びつけ相互発展

をすることが必要であると意見があった。

にぎわいという若者に結びつけられがちで、若者が元気というのは非常にいいが、若者だけに頼るのではなく、それぞれの世代のにぎわいを考えてみてはどうかと意見があった。

最後に、にぎわいの場ということで、「中間像」では公共建築の活用、「めざしたい姿」は、「空地」や「空き家」の言葉が出ているが、例えば臨海部の工場の敷地など使い方が大きく変わっている中で、空き家だけでなく事業者の持っている土地の活用もあるのではないか。

個別の話になるが、「⑳何度でも来たいと思う阪神ツーリズム」について、阪神南県民センターから阪神間モダニズムの再発信プロジェクト基本構想ができたこと事例の紹介があった。阪神間モダニズムの様々なものを発信していくという。10年くらいの基本構想であるが、続けて定着させていくということが大切であると意見があった。その中で、「⑳何度でも来たいと思う阪神ツーリズム」の「めざしたい姿」で「インバウンドも増え」という言葉があるが、果たして、その阪神ツーリズムのゴールが「インバウンドも増え」というところなのだろうか。そうではなくて、「マイクロツーリズム」という言葉が出ているが、地域に愛されるということが大前提で広がればいい。インバウンドが、ゴールのように見えてしまうのはどうか。

にぎわいには、いろんなにぎわいの質や種類があるが、地域ごとに有休空間を使っているような小さなにぎわい拠点や空間をあちこちにつくる。いつもあそこに行けば誰か知り合いがいるとか、何か出来事、単発的ではない常態的なイベントがある、そういうところをめざしてみたらどうか。

#### 【委員】

大きな方向性が整ってきている。グループ毎に内容が少し異なるので、属性や対象でこんなテーマのシナリオがいい、地域で取り組むべきことでシナリオを書いた方がいい、社会、人づくりでソフト部分について書いたらどうかという意見がいくつかのグループにあった。事務局で整理いただき、統一した何かで整えるならば整理する。

もしかしたら何かスイッチがいののではないか、50年間かけて入るスイッチって何だろうかということで、人づくりでいろんな環境教育や文化の教育、防災教育など、様々な教育が結実して、子ども達が住みたいまちで安心感を得られたら、将来の社会像が想定できる。全体をまとめると、将来の社会像の想定が50年かけてこうなるという「大きな流れ」になり、その流れがいろんな対象につながるかもしれない。そういった構造化の話も、今回の話の整理したうえで次回に議論できればよい。阪神間らしさを具体的な言葉として書いていくためには、まだ議論の余地がある。社会システムという点は難しいが、都市に近い多様な地域を持つ阪神地域らしさを多く出していけそうだ。具体的な書き方については、将来像を書かないという意見もあったが、より具体的な表現、新しい考え方も入れていく作業をするのはどうか。

次回も今回のグループを継続し、今日の議論も頭に入れてグループディスカッションを行いたい。グループをシャッフルすると、今日の話を変えて行うことになりかねない。次回までに事務局で共通性等を整理し、できる範囲で2次のたたき台をお示しするようお願いする。